# ホラーティウスにおけるトロヤ戦争の英雄たち（4）

松　田　治

## V　アキレウス

### （1）原型の再現[1]

アキレウス（*'Αχιλλεύς*）という名前を，古い時代に *ἄχος*「苦悩，悲哀」という名詞から派生したものであると主張する人もいるが，この語源説の当否はともかく，この語の起原が古いことは間違いないようで，前ギリシア時代にさかのぼるものとされる[2]。言葉の段階での古さは，当然のこととして，口誦伝承の中でこの名前を名乗る人物が活動を始めた時代の古さにも通じる。G. S. カークは，——eus で終る人名は，特にそれが非ギリシア語幹を持つ場合，最古期の名前の一つであるとする言語学者たちの考えをいれ，テューデウス（Tydeus），ネーレウス（Neleus），サルモーネウス（Salmoneus）らを例にあげており，特にアキレウスについては「アキレウスは古いグループの一員であって，彼の置かれている神話的文脈から示唆されるような新しい準伝説的なタイプではあるまい」としている。この古いグループというのは，彼の分類によると，「英雄たちは，その主たる活動がトロヤ戦争より遙か以前の無時間的過去の時代に設定されるか，または戦争そのものに近接しているかに応じて，古い型と新しい型に分かれる」[3]，その古い型の人物群である。アキレウスはホメーロスによって記録され定着させられた。伝説の英雄としての発展の原初にあった人物像がいかなるものであったか知るよしもないが，それが前ギリシア期に属するというその古さは想像に難くない。

ホラーティウスがオデュッセウスとアキレウスを対立的に捉えているということは前に述べた[4]。この対立はむろんホメーロスにおいて見られるもので，一つの伝統である。我々はこの対立をホラーティウスが特に知性と激情（野蛮）という図式で捉えていたものと考えた。この対立ということについて，ホメーロスの世界で見るならば，これが最も如実に表われるのは，*Od.* 第11巻でオデュッセウスが冥府に降ってアキレウスと出会うあの場面である，と指摘する人がいる[5]。*Od.* ではアキレウスは既に鬼籍にある。それゆえ生者オデュッセウスと霊魂アキレウスとの対話が設定できるのである。ここで，アキレウスは「死から帰還」できないゆえに「帰郷」できないことが明らかになる。オデュッセウスの見るところ，死者の世界でもアキレウスは王者であるが，しかしアキレウスは，死者の王となるよりも，奴隷でもよいから生きていたほうがよいと言う[6]。生者と死者の分岐は生きとし生けるものにとって最も大きな決定的な境遇の差異を生むことになる。Frame は，オデュッセウスとアキレウスのこの対立は nóos（精神，知）を保有する者と喪失した者との対立であることをホメーロスの文章に拠って言明する[7]。

---

1) ホラーティウスの作品は次のように略記する．*C.*＝*Carmina*（抒情詩集），*Sat.*＝*Saturae*（諷刺詩集），*Epd.*＝*Epodon Liber*（エポードス集），*Epst.*＝*Epistulae*（書簡詩集），*A. P.*＝*De Arte Poetica*（詩論）．ホメーロスの *Ilias* は *Il.*，*Odysseia* は *Od.* と略記する．

2) H. Frisk, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg, 1960, s. v. *'Αχιλλεύς*.

3) G. S. Kirk, *The Nature of Greek Myths*, Penguin Books, 1974, pp. 145-146（カーク『ギリシア神話の本質』辻村誠三・松田　治・吉田敦彦訳，法政大学出版局，1980年，162-163頁）．

4) 拙稿「ホラーティウスにおけるトロヤ戦争の英雄たち」(2)『流通経済大学論集』Vol. 12, No. 2, 1977, 11, p. 38 以下．

5) Douglas Frame, *The Myth of Return in Early Greek Epic*, Yale Univ. Pr., 1978, p. 117.

6) *Od.* 11・485 以下．

7) D. Frame, *op. cit.*, pp. 117-118.

そしてこの nóos の有無と二人の対立とを結びつけた考察は，ホラーティウスの捉えかたについての我々の考察（知性と激情の対立）にも通じるものがある。

それではホラーティウスの描くアキレウスを仔細に見ることにしよう。彼はホメーロス以来伝統となったこの英雄のイメージを殆どそのままラテン語で記述している。また詩人みずからこの人物の伝統的なイメージを守らなくてはならないと他人にも忠告している。次の文章は後期の作品（*A. P.*）の一節であるが，舞台でのアキレウスは特にその性格が首尾一貫しなくてはならないと述べ，伝統を強く意識していることを示している。

> aut famam sequere aut sibi convenientia finge scriptor. honoratum si forte reponis Achillem, impiger, iracundus, inexorabilis, acer iura neget sibi nata, nihil non arroget armis.
>
> ものを書くのなら，伝統に従うか，または首尾一貫した筋を考えなさい。もしあなたが栄光の絶頂にあるアキレウスを再現するなら，彼は行動的で，怒りっぽく，無慈悲かつ乱暴でなければならない。また彼は法律など無用だと言いはり，よろず武器に訴えるのでなければならない（*A. P.* 119-122）。

一般に『詩論』（*De Arte Poetica*）と称される作品は，ピーソー（Piso）という人物の二人の息子に，ホラーティウスが劇詩を作るときの心構えを説くために書いた書簡詩であるとされる。上に引用したのはその一部分で，ここは悲劇を問題にしている[8]。登場人物の描きかたの一例としてアキレウスが出されている。訳文で示したように，アキレウスの性格は，まさに彼を英雄たらしめた基本要素を表わす四つの形容詞と，付加された二つの文章によって，的確に表現されている。このくだりは戦士としての彼の姿を彷彿させる。このホラーティウスの一節で昔からしばしば解釈上の問題となったのは，120行の honoratum si forte reponis Achillem（もしあなたが栄光の絶頂にあるアキレウスを再現するなら）の中の honoratum という形容語である。

その解釈は大まかに言って二つに分かれる。「有名な」と「名誉ある」の二つである。たとえば古いところで Orelli はこの honoratum を illustrem と同義として，「あらゆる人々が彼を最高の英雄の手本としていやが上にもほめちぎるほどに有名な」としている[9]。Orelli はこの「有名」の出所をホメーロスに求める（Homeri *ἀγαυόν, κλυτὸν Ἀχιλλῆα*）。「ホメーロスによって，*Il.* によって有名な」という解釈は Heinze や Morris らに継承されており，かつてはその意味を明確にしようとのあまりに，この honoratum を Homereum「ホメーロスの」と直す校訂者もいたほどである[10]。

「有名な」とする解釈にはもう一つの枝がある。有名であることの原因を特に *Il.* に限定せず，アキレウス伝説をめぐって創られた多くの悲劇のことをホラーティウスが暗示しているとの解釈である。すなわち「舞台でよく知られた，おなじみの」という語釈であり，これは

> もしあなたが従来試みられたことのない主題を舞台に取り入れたり，あえて新しい人物を創造するなら（*A. P.* 125-6），

という文章の中の未知数（siquid inexpertum），新しさ（personam novam）との対立を示すために用いられた形容語とする解釈である[11]。

Heinze は，この語は *Il.* 中のある特定の状況と関連して使われているのではないと言っているが，いまひとつの「名誉ある」という解釈をえらぶ人々は，まさに Heinze の否定してい

8) P. Grimal, *Essai sur l'Art poétique d'Horace*, Paris, 1968, p. 136. Orelli, ad loc.

9) Orelli, ad loc. : 'tam illustrem, ut omnes tamquam summi herois exemplar ultro eum praedicent.'

10) Bentley, ad loc.

11) Villeneuve, ad loc.

ることを主張する。ここで特に好んで言及される *Il.* 中の状況は二つある。一つは，アキレウスは最初アガメムノーンに侮辱されて面目を失ったが，しかしあとでアガメムノーンのほうが彼のもとに使節団を派遣して詫びを入れ，戦列復帰を懇願せざるをえなくなるというエピソードである（*Il.* 第9巻）。もう一つは，パトロクロスの仇討ちという大手柄（ἀριστεία，第18，19巻）を立てるなどして結局アキレウスは大きな名誉に包まれる。honoratum はそのようなときのアキレウスを示す語である，という解釈である[12]。

これが「良い」意味で用いられた褒め言葉であることは間違いない。しかしその解釈は，上に示したような枠や背景を総合的に考え合わせなければならないようである。このことは，この場所で詩人が何を論考の対象にしているかということに密接に関連する。いわば第三の解釈を提示することによって，この honoratum の意義を最も明確にしたのは P. Grimal 教授である[13]。

アキレウスはホメーロスの叙事詩に限らず，あらゆるジャンルで周知された「有名な」人物であり，また最高の戦士として「名誉に包まれた」人物でもあった。その経歴を通じて実に様様な話が伝承され，知られている。特に *Il.* は，跪くプリアモスに自分の条件を言い渡す，ヘクトール打倒者としての英雄のイメージを広めた（第24巻）。あるいはまた，繰り返しになるが，将軍たちからなる使節団が来て，慇懃に礼を尽くし，考えられる限りの償いを申し出て彼に戦列復帰を請う場面がある（第9巻）。

しかし他に，彼にとって自慢にならないエピソードもある。既に触れたように，自分が主人公である *Il.* においてさえ，彼はアガメムノーンに侮辱される（第1巻）。他の伝承によると，アキレウスはトロヤへ出陣する前はスキューロス島に隠れ住んでいた。リュコメーデース王の娘たちの中に女装してまぎれ込み，娘の一人デーイダメイアと交わって一子をもうけた。母テティスの指図に従って未練にも女装で身の安全を保とうとする姿である。またアウリスの港で風待ちする間にアガメムノーンの計略で呼び寄せられたその娘イーピゲネイアを，全軍の意向に反して助けようとするうちに彼女に恋してしまう場面[14]とか，トロヤ王プリアモスの娘ポリュクセネーを得るためにあえて交わしたと伝えられるトロヤとの取引き[15]など，女性にまつわる弱みを伝えるエピソードがある。このような場面でのアキレウスは honoratum「名誉ある」人物ではない。以上のような状況からすれば，このくだりは，「もしあなたが，名誉の絶頂にあるときのアキレウスを表現するのだったら，そのときは，彼は暴力的云々でなければならない。しかしそれ以外の時点（一般に *Il.* には出てこない場面）での彼を再現する場合は，彼はもっと優柔不断で，恋に心を動かし，譲歩も知り，戦争や名誉などどうでもよいとする，そういうふうな人物として描かねばならない」という意味に解釈できよう。Grimal 教授の推測によれば，ここでホラーティウスは時々ホメーロスに対してなされる非難を考えているらしい。すなわち，*Il.* 第24巻で，闇にまぎれてアキレウスの陣屋を訪れた老王プリアモスはこの勝利者に自分の息子ヘクトールの死体を返すよう頼むが，このときアキレウスも父ペーレウスの老境に思いをはせて，老王とともに泣くのである。*Il.*の見せ場の一つであるこの人間味あふれる場面で

12) Plessis-Lejay, Fairclough, Wilkins, ad loc.
13) P. Grimal, *op. cit.*, pp. 137-138.

14) これはとりわけエウリーピデースの悲劇『アウリスのイーピゲネイア』によって知られる．ギリシア軍はトロヤ遠征を目前に控えてボイオーティアの港町アウリスに結集したが，順風に恵まれず出港できない．ある占者が，これはアルテミス女神の怒りがあるためで，アガメムノーンはその娘イーピゲネイアを女神に捧げねばならないと予言する．そこで彼は，アキレウスとの婚礼のためだと偽って，妻クリュタイムネーストラーと娘の二人をアウリスに呼び寄せる．アキレウスも訳を知らないが，この娘の犠牲に反対し，やがて全軍のために我が身を捨てようと決意する乙女の凛々しさに打たれてこれを恋する，という物語である．
15) 彼女を妻にするために，戦場を去って帰国する，あるいはギリシア軍を裏切ってトロヤ方につく，といったことを申し出たとされる．これはトロヤ叙事詩圏の一作品『イーリオスの陥落』で伝えられた．

の彼の態度が，詩人であるより以上に理論家であったアレクサンドレイアの評家たちの目には，他の誰にもまして暴力的なこの英雄には不似合いな，ありうべからざる弱みと映った。すなわち，ヘクトールを倒して友パトロクロスの復讐をとげた直後で，最高の栄誉に包まれているこの時点で，アキレウスは涙など見せてはならないのである。ホメーロスの英雄たちの涙については前にも述べたが，ここでホラーティウスはホメーロスをこの点で非難しているのではない。Grimal 教授が指摘するように，確かにこの性格描写には，アレクサンドレイア派が嚆矢となった論争の反響が見られるようであるが，ホラーティウスは，悲劇作家が英雄を登場せしめるときはその性格の様々なニュアンスを徹底的に首尾一貫させなくてはならないと述べているのである。

かくして，上記引用のアキレウスの性格表現は，悲劇の主人公となる場合のことであるとの限定を念頭に置かねばならない。ホラーティウスがアキレウスに託するイメージはこれが全てではないのである。とはいえ，impiger（行動的），iracundus（怒りっぽい），inexorabilis（無慈悲な），acer（乱暴な）という四つの言葉の表現力は大したものであり，ホメーロスにおけるアキレウスをおおむね言い尽くしていると言えなくもない。そしてこの暴力的なアキレウス像こそ，第一義的にホラーティウスが，というより古代の詩人たちがこの英雄に対して抱いたイメージであることに変りはない。

### (2) 夭折の代償

アキレウスは神々の合意，あるいは彼と神々との合意により短い一生を送る定めにあった。その代償は華々しい功業であり，それはヘクトールを倒してパトロクロスの仇を討つことによって果たされた。

この英雄の若死もホラーティウスにとって神話モチーフの一つになった。その代表的な例は *Epd.* 13 (Horrida tempestas) である。この作品は有機的に重なり合って移行する三つの部分（悪天候，饗宴，神話）からなる[16]。外では嵐が吹き荒れ，豪雨，雪が大地を鞭打つ。その間に詩人は友人たちに次のように勧める。その日その日のチャンスは必ずつかまえること (rapiamus, amici,/occasionem de die, 3-4)，酒宴の仕度をし，憂いを去り，明日のことは思い煩わないこと (cetera mitte loqui, 7)，憂いはヘルメースの楽器で追い払うこと (fide Cyllenaea/levare, 9-10)。この提案に続いて，直喩の形で一つの神話の例が語られる。気高いケンタウロス (nobilis Centaurus, 11) は，成長して今やトロヤへ行こうとする愛弟子アキレウスに次のように餞の言葉をかける。

> 無敵な者よ，女神テティスから生まれた人の子よ[17]，そなたにはアッサラコスの地（＝トロヤ）がまだ残っている。その地を小さいスカマンドロスの冷たい水と滑らかなシモエイス川がつらぬいているが，そこからのそなたの帰り路は，寿命(パ)の女神(ルカ)たちが確かな生命の糸で測って断ち切っている。また蒼い〔海に住むそなたの〕母もそなたを故郷へ連れ戻してくれない。かの地では全ての禍を酒と歌で軽くするがいい，この二つは人を醜くする悲痛を癒す甘美な慰めである（*Epd.* 13・12-18)。

心に苦痛があるときどうすればよいかという問題である。この作品については苦汁，幻滅の調子が指摘される[18]。詩人は前半では自分の言

16) Teivas Oksala, *Religion und Mythologie bei Horaz, Eine literarhistorische Untersuchung*, Helsinki, 1973, p. 131.

17) 'invicte mortalis dea nate puer Thetide.' Wilkinson は，この一行は，半分人間で半分は神であるアキレウスの二重性を表わしていると言う．彼によると Nietzsche は，*Carmina* を模倣不可能にしている主因は，この行文に見るような巧妙この上ない語の配列であると評価していた．L. P. Wilkinson, *Horace and his Lyric Poetry*, Cambr. U. P., 1968, p. 147.

18) Plessis-Lejay, *Epd.* 13 の序．Carrubba はその *Epd.* 研究書において各作品のテーマ別分類を論じており，それによると問題の *Epd.* 13 は 'Erotic and Sympotic' という項目に入る作品の一つとする扱いかたが有力である (Olivier, Port, Villeneuve, Kirn, Fraenkel ら)．彼自身もこれに与する．*Epd.* 集分類のため

葉でその癒しかたを述べる。このような調子の作品ではいつも見られる現在主義（cf. carpe diem, *C.* 1・11・8）が前面に出され，型の如く酒が添えられる。後半部から最後にかけて，今度は賢者ケイローンの直接話法の形で具体例をもって自分の意見を繰り返す。神話の世界がここでも巧みに利用される。このケンタウロスは英雄の経歴(invicte)と尋常でない素姓(mortalis dea nate puer Thetide)をほのめかす。過去に触れるだけでなく，来るべき英雄的功業および死をも予告する。「そなたにはアッサラコスの地が残っている」(te manet Assaraci tellus, 13)という表現がトロヤでの彼の武勲と死を暗示する。この部分の表現は殆ど全てホメーロスにさかのぼる。スカマンドロス（＝クサントス）とシモエイスの二つの川は，特にアキレウスが無数の敵を刃にかける例の河畔の戦闘（*Il.* 第21巻）によってよく知られているので，詩ではしばしばトロヤ一帯の代名詞になるほどである[19]。スカマンドロスは，今は（ケイローンが語っている時点では）小さいが，一度河神が激怒してアキレウスを追いまわすときは波浪を立ててふくらむ[20]。その渦巻は今は冷たいが，そのうちヘーパイストスの炎によって沸騰するであろう[21]。またシモエイスにしても今は滑らかに流れているが，これも敵の死体で満たされるときが来る[22]。そして，Oksala が言うように，この英雄を仕留めて夭折の予言を実現させるいまわしい弓矢の存在は，te manet……te revehet という長い文章の中で匂わされている[23]。ケイローンの助言は全て予言であり，*Il.* において記述されるところである。アキレウスの人生は短い。その短さに合わせるかのように，ケイローンの助言も7行という僅かな空間で，英雄がトロヤで果たすであろうことを要領よく言い尽くしている。

ホラーティウスはここではケイローンとアキレウスの師弟関係，アキレウスのトロヤでの活動という二つの神話事実を手際よく結合して，自分の主張に彩りを添えている。帰するところはやはり詩人みずからの現在の関心事に他ならない。

アキレウスの短命の悲劇とは対照的に，呪うべき長寿に見舞われた人物もいる。こういう点でギリシア神話は尽きることを知らない宝庫である。そしてこの長寿と短命のコントラストをうまく扱った文例がホラーティウスにある。

> 精神は現在の物事に満足して先のことを思い煩ってはならず，人生の苦悩を静かに笑って和らげねばならない。あらゆる点で祝福されたものなどありはしないのだ。早い死があの誉れに輝くアキレウスを奪い去り，長い老境がティートーノスを消尽させた（*C.* 2・16・25-30）。

ティートーノスは曙の女神エーオース（＝アウローラ）に愛された。女神は愛する男のために神々から永遠の生命を貰い受けたが，永遠の若さを求めることを忘れたために，ティートーノスは年月を経るうちに老い衰え，最後は蟬に変身した，との伝説がある。女神の愛の結果であるとはいえ，これはまったくの無為の長命の例である。アキレウスは名誉の頂点をきわめるものの夭折を余儀なくされる。その名誉の大きさに正比例して死が迅速に訪れるのであるが，その素早さは，ティートーノスの緩慢な老衰が生み出すコントラストによって強められてい

---

に彼があげた他の三つのテーマは 'Political or National', 'Country Life', 'Invective' である. R. W. Carrubba, *The Epodes of Horace*, Mouton, 1969, p. 34 et p. 82. アキレウスの名はあっても，この作品は戦争や武勲の勧めではない. Carrubba は次のように言っている.「*Epd.* 13 において明白かつ疑問の余地のないこと，したがって，前30年（*Epd.* 集が出版されたと一般に推測されている年——引用者注）の Hor. の読者がこの作品に触れてまず第一に学んだに違いないのは，酒，歌，気のおけない友だちづきあい，および恐らくある神もしくは神力が先ぶれしてくれる幸先よい変化などが，日々の生活をうっとおしくする不安——それがどのようなものであれ——の解消策だ」ということである (p. 82).

19) Kiessling-Heinze, ad loc.

20) *Il.* 21・233-272.

21) *Il.* 21・348-382.

22) *Il.* 21・218-220.

23) Oksala, *op. cit.*, p. 132.

る[24]。この部分の主旨は知足の勧め[25]であり，物事には過ぎたるもの，及ばざるものがあるとのことを明示するために二人の対照が巧みに用いられている。

### (3) アキレウスの死の意味

ここでいま少し，ホラーティウスの作品からホメーロス以来の伝統につながるアキレウス像を取り出し，その再話に何らかの意義があるのかどうか，あるとすればどのようなものであるかを考えてみたい。

カルミナ第4巻は最晩年の作品の一つで，前13年頃出版された。その中の第6篇は全44行の作品であるが，その前半分を費やして詩人はアキレウスを語っている。抒情詩の中で神話の英雄がこれほどのスペースで語られるのは珍しく，当然何らかの意図があろうと予測させられる。この作品は，詩そのもの，および詩を業とする者——ホラーティウス自身も含めて——たちの守護神で，アウグストゥスとも縁の深い神ポイボス・アポローンをたたえることを主眼としている。この神と不都合な形でかかわり合った人間の一例としてこの英雄が引合いに出されるが，簡単な言及では済まず，詩の半ばまで彼についての話が続けられる。

神よ，あなたが大言壮語を懲らしめられることは，ニオベー[26]の子らや掠奪者ティテュオス[27]が思い知りました。またそびえるトロヤの征服者になりかけたプティーアのアキレウス[28]もそうでした。
彼は他の者たちよりは偉いが，あなた様には比すべくもない兵士，とはいえこの海の女神テティスの息子は，果敢に闘ってトロヤの塔や櫓を恐るべき槍でゆさぶりはしましたが。
この者は，あたかも食い込む剣で切られた松か，エウロス（＝東南風）に根こそぎにされた糸杉のように，長々と倒れ伏し，その首をトロヤの土埃に埋めたのでした[29]。
この者は，ミネルウァ（＝アテーナー）への供物と偽った馬の中に閉じこもり，不運にも祭りの最中だったトロヤ人や，歌舞に喜び浮かれるプリアモスの館を欺くことはありませんでした[30]。
しかし白昼捕われた人々にとっては恐怖そのもので，ああ，おぞましいことですが，まだ口もきけない子供らを，更には母親の胎内に隠れている子をさえもアカイア[31]の炎で焼いたでありましょう，
もしあなたと優しいウェヌスの願いをいれて神々の王が，アエネーアースの運命に，幸先よく線引きされる城壁[32]を託して下さらなかったならば（*C.* 4・6・1-24）。

話題の核はアキレウスの死である。彼はトロヤの王子パリスの矢で射たれて最期を遂げる。このパリスを助けるのがアポローンである。アポローンは，ウェヌス（＝アプロディーテー）とともにトロヤの守護神であり，愛するこの都を攻めるアキレウスはしたがってこの神にとっ

24) Oksala, *op. cit.*, p. 134.
25) 作品のテーマは otium，すなわち不安と欲望から解放された自由の境地（アタラクシア）であるとされる．Steele Commager, *The Odes of Horace, a Critical Study*, Yale U. P., 1962, p. 333.
26) テーバイ王アンピーオーンの妻．多くの男女児に恵まれ，アポローンとアルテミスという二人の子供しかいないレートーよりも自分がまさっていると誇ったために，この兄妹神に子供たちを皆殺しにされ，みずからは石と化した．
27) ゼウスが数多くもうけた不義の子の一人．そのために神々の女王ヘーラーの怒りを買い，レートーに不届きな行為を働くよう仕向けられ，兄妹神に射倒される．
28) プティーアはアキレウスの父ペーレウスが支配したテッサリアの町．アキレウスに従ってトロヤへ行ったミュルミドーン人らはこの町の住民だった．
29) あなた様（アポローン）の導く矢で射られて，の意．樹木が倒れるのと，戦士が討死する様との比較はホメーロスが好んだ．*καππεσέτην ἐλάτῃσιν ἐοικότες ὑψηλῇσι*「（クレートーンとオルシロコスは）まるで高い樅の木のように倒れた」（*Il.* 5・560）．他に *Il.* 16・482-3 では，パトロクロスに討たれて倒れるサルペードーンの姿が，柏（drŷs），白楊（akherhōís），松（pítys）などになぞらえられている．
30) 木馬の計略はオデュッセウスが考案したもので，アキレウスはその実施前に死んだ．
31) トロヤへ遠征したギリシア軍のこと．
32) ローマの都の城壁のこと．

ても敵である。だから，大勢の子供に恵まれてこれをレートーの子ら（アポローンとアルテミス）より美しいと自慢したニオベーや，このレートーを凌辱しようとしたティテュオスと同様に，アキレウスもこの神の復讐を免れなかった。思い上がり（ヒュブリス）に対する罰である。アキレウスの死の有様を直接綴った文章は *Il.* にはない。この作品は英雄が友パトロクロスの復讐を果たした時点で終っている。ただ，ホメーロス自身はこの伝説を知っていた。それはたとえば，一騎討が終って死に瀕しているヘクトールの次のような言葉で判る。

> だがこれからよく用心するがいい，俺がおまえに対する神々のお怒りの原因になるかも知れないのだ，パリスとポイボス・アポローン様がおまえを，どんなに強かろうとも，スカイアイ門で討ちはたすであろうその日に（*Il.* 22・358-360）。

またアキレウスみずからも自分の運命を母テティスから知らされていた。クサントス（＝スカマンドロス）川の神に追いかけられたときに，自分を救おうとしてくれぬ神々に愚痴をこぼす場面で，母が自分を騙したと次のように言う。

> しかし，愛しい母上は，嘘いつわりでもってわたしを欺いておいででした。母上は，わたしが，胴鎧を着たトロヤの戦士たちの壁の下で，アポローン様の素早い矢に当って，死ぬだろうとおっしゃったのだから（*Il.* 21・276-8）。

トロヤ伝説を素材とする叙事詩としては，ホメーロスの二作品の他に，後の人々が作ったもの（断片しか伝わらない）もあった。『キュプリア』，『アイティオピス』，『小イーリアス』，『イーリオスの陥落』，『帰国物語』，『テーレゴネイア』といった作品群である。これに *Il.* と *Od.* を加えて全体でいわゆるトロヤ伝説叙事詩圏である[33]。*Il.* に続くのは『アイティオピス』（エチオピアの王メムノーンがトロヤ側の援軍として活躍する）で，アキレウスの死は実はこの作品の一場面となっていた。ホメーロスの時代の人々はこの英雄の死を常識的に知っていた。

さて，彼の戦士としての凄まじさは，先に引用した *C.* 4・6 の17—20行に表現されている。もしユーピテルが干渉しなかったならば，彼は戦士を殺戮するだけでは足りず，最も劣弱な幼児や胎児をさえ殺したかも知れない，というほどのものである。しかし実際にこのようなことをする以前にパリスの矢で殪された。アキレウスがもし生きながらえたらやったかも知れないとホラーティウスが述べるこの残虐行為は，ホメーロスの作品ではアガメムノーンが「やらねばならないことだ」としてトロヤ方をののしる言葉にさかのぼる。

> あいつら（＝トロヤ人）の誰一人として全き死から，またわれら（＝ギリシア人）の手から逃がしてなるものか，母の子宮の中にいるのが男子であればその子も，また逃亡兵でさえも。全ての者が同時にイーリオン（＝トロヤ）から完全に亡び去るがよい，埋葬もされず跡かたもなく（*Il.* 6・57-60）。

ホメーロスは胎児とだけ言ったのをホラーティウスは更に乳児も付け加えている。本来はアガメムノーンの言葉であったが，これをアキレウスに結びつけたのは，このような攻撃性，野蛮さという点で結局この英雄たちにはだいたい同じ傾向があったと詩人が見なしていることを示す。

この蛮性を英雄たちに共通のものとして見ても，それでも戦闘におけるアキレウスの果敢さ

---

33) L. Séchan によれば，この叙事詩群は，後2世紀の人と推測される文法家プロクロスが要約したようである（*Sept légendes grecques*, Paris, 1967）．これを更に9世紀のポーティオスが抜萃して，それぞれの内容を今日に伝えた．現在我々はトロヤ戦争の発端から英雄たちの帰国までの伝説の総体をアポロドーロス作とされる *Bibliotheke*（高津春繁訳『ギリシア神話』，1953年，岩波書店）によって大まかに知ることができる．

は文字通り鬼神もこれを避けるていのもので，その右に出る者はなかった。その意味で彼は第一の英雄[34]，典型的英雄たりえたのである。この，まさにギリシア軍きっての最強の英雄だったこと，母胎さえもくり抜いたかも知れない英雄だったこと，このような点に我々は，なぜホラーティウスがアキレウスに拘泥して24行も費やしたか，ということの意味を求めることができるであろう。

これは引用部分の最後のスタンザから読み取れる。アポローンとウェヌスがユーピテル（＝ゼウス）に懇願して認めてもらったこととは何か。それは，「アエネーアースの運命に，幸先よく線引きされる城壁を託す」ことであった。アエネーアースはローマ国家の礎を据えたと伝えられる英雄である。「幸先よく線引きされる城壁」とは言うまでもなく将来のローマの城壁[35]ということであり，「幸先よく」と訳した表現（potiore……alite, 23-24）は直訳すれば「好ましい前兆をもって」であり，これは，悪しき運命を逃れられず惨めに潰えたトロヤとは対照的に，未来のローマを祝福する瑞兆のことである[36]。

アエネーアースに神々が課した任務は，ローマの礎を据えるべくイタリアへ行くことである。したがってトロヤで生き残らねばならない。これはアキレウスが生きていては叶わぬことである。トロヤ陥落は例の木馬の計略によって決定的になった。木馬の腹中にはオデュッセウス以下の戦士たちがひそんでいた。もしその中にアキレウスがいたらどうなるか。彼は戦士たちはおろか，敵と名がつけば胎児までも血祭りにあげたであろう，むろんアエネーアースもその犠牲となったであろう，とホラーティウスはアガメムノーンの言葉を借りて言っているのである。

アエネーアースなくしてはローマの基礎は考えられない。だからアキレウスはトロヤ陥落以前にその生涯を終えていなくてはならない。アポローンとウェヌスの願いは，トロヤ陥落と引きかえに，この最大の英雄の予言されていた若死を，木馬作戦以前に生ぜしめることであった。これはゼウスのいれるところとなり，かくして事態はすべて神々の意志に基づいて運命の糸にあやつられ，アキレウスはトロヤの戦野で世を去った。

アキレウスはトロヤにとって最大の敵であった。しかし彼は直接的にはトロヤの征服者たりえなかった。「トロヤの征服者になりかけたアキレウス」(Troiae prope victor Achilles. 3-4) という表現は，木馬計略以前に死んだので，トロヤにとどめを刺した最後の戦闘ではその武勇を揮えなかったアキレウスということである[37]。そのためにアエネーアースは無事トロヤを脱出することができた。この脱出を可能にしたのはアポローンであり，神はこの戦争でトロヤ庇護の態度を最後まで貫いたことになる——もっともこれはゼウスの命令，または運命の定める範囲でのことであり，神が愛してやまなかったヘクトールの死は，神々の合意があったため，結局は座視せざるをえなかったけれども。ともかく，アキレウスの死だけがトロヤ人の絶滅を防いだのであり，アエネーアースがトロヤ人の血とトロヤの神々をイタリアへ運ぶことを可能にしたのである。今，この時点で，詩人は，過去においてアポローンがトロヤに見せたこの愛護を今日のローマにも授けてくれるようにとの気持をこめて，この神をたたえている。

34）アイアースのことを語るのに，「アキレウスに次ぐ英雄」と表現してアキレウスを基準にしている例などがある（*Sat.* 2・3・193：Aiax, heros ab Achille secundus).

35）伝説でアエネーアースが築いたとされるのはラウィーニウムという町であるが，ここから一族がアルバ・ロンガへ，さらにローマへと発展を遂げたと考えられた.

36）1-20行はギリシア神話であるが，21-24行（第6スタンザ）では話題がローマ史へ移行している．Fraenkel はこれを 'one of those gentle transitions in which Horace excels' と評価している．Eduard Fraenkel, *Horace*, Oxf., 1957, p. 402.

37）3行目の 'prope victor' については，アキレウスはアポローンに助けられたパリスの矢で倒れ，トロヤ陥落前に死んだため，征服者になり損ねたとする解釈(Plessis-Lejay) と，アキレウスはヘクトールを倒したのでトロヤ征服者も同然であることを意味するとの解釈 (Page, Orelli) に分かれる．我々は前者を選ぶが，それは，彼が征服者になり損ねた結果アエネーアースが生きながらえ，トロヤとローマの結合が可能になったとする詩人の思考によりふさわしく思えるからである.

アエネーアースはロームルスと並んでローマ起原伝説の重要な英雄である。彼が神々から託された運命を双肩に担ってトロヤからイタリアへ到着し，ラウィーニウムで城を築いた時点で，ローマの歴史が始まったという意識が当時の一部のローマ人にはあった。この考えかたをウェルギリウスはローマ前史とも言うべき壮大な叙事詩 *Aeneis* に発展させた。ここでも当時（ホラーティウスやウェルギリウスの時代）のローマの平和，繁栄の根はトロヤに求められたのである。

ローマの定礎者といえば時間的にはるかに遠い存在であるが，そのアエネーアースを当時のローマ人の意識の中で身近なものにさせていたいま一つの要素は，ユーリウス・カエサルやアウグストゥスらの属していたユーリウス一族（gens Iulia）の家系の問題である。周知の如くカエサルは，アエネーアースの子アスカニウスの別名がユールス（Iulus）であることに着目して，ユーリウス族の祖はこのユールスであり，したがって他ならぬウェヌス女神が自分たちの原母であると自慢した[38]。女神とアンキーセースとの子がアエネーアースだったからである。むろん知識階層がこの話を真剣に受けとめたとは考えられないが，独裁者がどの神を原祖に仰ごうと一般民衆に実害の及ぶべくもなく，むしろ派手好みのローマ人にはこのような華々しさが受けたであろう。この種の系図粉飾はカエサルに限らず共和政末期の有力者たちに共通の現象で，彼らは各自何らかの神の子孫であると僭称した[39]。カエサルの養子として権力を継承しローマを支配したアウグストゥスもまたウェヌスの子孫である。カエサルは没後アウグストゥスの働きで神になった。アウグストゥス自身も神として祀られた。したがって二人は，過去については証明不能なことを主張したが，この神孫伝説を自分たちの代で強引に実現させたことになる。

この作品でアウグストゥスの名は表われないが，詩人がその存在を意識していることは明瞭である。それは，ここではアポローンの名前により添う影の如きものと言えよう。アクティウムの海戦[40]の勝利（31年）をはじめとするこの神とアウグストゥスとの関係を知っていたローマ人が，この表と裏をたやすく推察したであろうことは想像に難くない。詩人はポイボスが自分に詩の霊感を吹きこみ，詩作の技と詩人の名前を与えたとする（29—30行）。ここを読む限りでは詩人個人と神との関係を云々しているに過ぎないように見えるが，すぐ次の行からこの詩の最後までの3スタンザ（31—44行）は，現在のホラーティウスの半ば公的な詩人としての立場に触れたものである。

すなわち，31行から36行にかけて，詩人は，良家の少女たち少年たちに，サッポー詩体で作った詩（Lesbium pedem）の合唱を指揮する自分の姿を想像して記述している。最後のスタンザからも明らかになるように，少年少女たちが合唱するこの作品は，前17年，世紀祭（ludi saeculares）が挙行された際に，神殿で神々に奉納するべく——恐らくアウグストゥスの依頼によって——ホラーティウスが書いた合唱詩 *Carmen Saeculare*（*C. S.*）に他ならない[41]。

38) スエートーニウスは，カエサルが叔母と妻の追悼演説をしたとき，一族の祖先のことについて次のように語ったと伝えている．「わが叔母の母方の祖先はローマ皇帝であり，父方の祖先は不死の神々である．何故なら，叔母の家名の源であるマルキウス王家はアンクス・マルキウス王から出ており，わが一門の本家であるユーリウス家はウェヌスの流れをくんでいるから．従って自分の血統は人間の間に絶大の権力を振う王族の尊厳と同時に王族を支配する神々として崇拝を受ける資格とを合せもつものである」（スウェートーニウス著，角南一郎訳『ローマ皇帝伝』上，1974年，現代思潮社，4頁）．

39) A. Alföldi, 'Die Geburt der kaiserlicher Bildsymbolik' (2), *Museum Helveticum*, 8 (1951), p. 209. なおこの Alföldi の論文は共和政末期のローマの支配者たちが，自分を原王ロームルスに似せるためにいかに努力したかを図像考察に基づいて論証している．

40) オクターウィアーヌスがマルクス・アントーニウスとクレオパトラの連合軍を敗ってローマ内乱に一応の終止符を打った戦争．

41) したがってこの作品（*C*, 4・6）は *C. S.* のプレリュード（Orelli, Villeneuve, Page），あるいは補足作品（Plessis-Lejay）であり，すでに *C. S.* の稽古が行なわれていたときに作られ，そしてその状況を伝えるものである（Fraenkel, *op. cit.*, p. 405）．但し，Hor. がその当日（世紀祭の3日目，Page, intr.）*C. S.* 合唱隊の指揮者（χοροδιδάσκαλος）として働いたとは考えられない（Kiessling-Heinze, intr.; Plessis-Lejay, ad loc.; Fraenkel, *op. cit.* p. 403-404）．

これは27名の少女たちと同数の少年たちの合唱であったことが知られている[42]。ウェルギリウスは前19年に他界していたので，作詩の大任は自然ホラーティウスに託されたものであろう。

さてこの世紀祭は，最初アウグストゥスは前23年に催す予定であったが，この年は数々の不祥事が相次いだために延期されていた。この祝祭の主旨はローマに平和と繁栄をもたらした神神——特にアポローン，ディアーナ（＝アルテミス）——に感謝を表し，かつ将来の加護をも祈念するというものであった。したがって本来宗教的な色彩が濃厚であった。しかしアウグストゥスの本意はあくまでも政治的なものだったと考えられる。神々が平和をもたらしたといっても，実際に数々の権力闘争を勝ち抜いて漸くローマ社会に一応の安定をもたらし，長年の内乱に終止符を打ったのはアウグストゥス自身である。この17年の祭儀はしたがって，ローマの平和と繁栄を内外に喧伝すると同時に（あるいはそれ以上に），彼のこれまでの業績および彼がローマ世界の覇者であるとの事実を広く世界的に認識させるための好機となった。こういう次第で，この作品（*C.* 4・6）ではアポローン，*C. S.* という作品などに伴ってアウグストゥスの存在が強く意識されるのである。

ここにこの作品の構成の妙がはっきり浮かび上がる。アキレウスの対立像はアエネーアースだけではない。アポローン自身はもとより、アエネーアース——ユールス……カエサル——アウグストゥスという系譜で代表される，トロヤとローマの時空を超えた融合，神界と人間界の枠をも取り去ったその融合の世界が，アキレウス一人に対立するという図式を詩人は我々の眼前に提示している。前半部と25行目から始まる後半部との対照は顕著である。前半では全身血だるまになってアキレウスが駆け，そして倒れ，後半は一転して詩と音楽の流れる平和なローマの世界である。更に詳細に見ていくと，前述したアガメムノーンの脅迫的な言葉をホラーティウスがアキレウスに適用して，かくもあろうと述べたのは，偶然や詩人の気紛れでないことが明らかになる。アキレウスがもし命ながらえたら殺したであろう「口もきけぬ子供たち」(nescios fari pueros, 18) は，後半の，詩人の指導のもとに合唱するローマの少年少女たち (virginum primae puerique, 31) の対立像である[43]。この 'nescios fari pueros' は，二つの世界の対立をより生々しく視覚的に図式化することを意図して詩人が導入した一句であろう。

現在のローマの平和，安寧，繁栄の要因は，遠くさかのぼれば実にアキレウスの死であった。繰り返すが，もしアキレウスが木馬作戦に参加していたならアエネーアースの生存は希みえず，ひいては今日のローマもありえなかったであろうというのが前半の主旨である[44]。したがってこの作品でアキレウスは，ホメーロスその他の詩人らが伝えた，ただ勇猛奮戦する英雄としてのイメージだけを見せているのではない。ホラーティウスは，彼を今日のローマと深くかかわるギリシア人として意識している。そして，この英雄の死を，糸杉がどっと倒れるように地ひびきを立てて土埃にまみれた[45]と叙事詩的に語りたいがために語るのではなく，ローマの今日をあらしめる基になったまさにその一瞬として意義づけている。そのために，ピンダロス的な調子で[46]一篇の半分を費やしてその死を語った

42) Hor. が *C. S.* の作詩者だったことを保証する大理石碑文，前17年の世紀祭の実際の模様，宗教色の濃い *C. S.* がそれにもかかわらず Hor. 独特の頌歌（カルメン）として作られていること，その私的要素のゆえにこの作品が世紀祭の公的儀式がすべて終了した時点（すなわち三日目の夜）で少年少女らによって歌われたであろうこと，以上については Fraenkel, *op. cit.*, pp. 365-382 および諸註家による *C. S.* の序を参照されたい．

43) 筆者の知る限りこのコントラストに言及した研究者はいない．

44) この点を Oksala は「アポローンは，最高神の決定に影響力を及ぼし，アキレウスを殺すことによって，決定的にローマ建設に貢献した」と表現している．*Op. cit.*, p. 160.

45) 'ille (sc. Achilles) mordaci velut icta ferro/pinus……/procidit late posuitque collum in/pulvere Teucro' (*C.* 4・6・9-12).

46) Villeneuve, ad loc. Fraenkel, *op. cit.*, p. 401, Oksala, *op. cit.*, p. 160.

のである。コントラスト[47]の使いかたに我々は構成の巧みさを見出した。いま一つ見落してならないのは，神話モチーフを扱うときに詩人の発揮する手腕であろう。アキレウスは長い伝統をもつ神話英雄である。詩人もこの伝統はよくわきまえている。このような人物が登場すると型どおりに行動しがちであり，記述者に神話記述以外の特別な意図がない限り，型どおりの行動はむしろ普通であろう。しかしホラーティウスの場合，前章でも指摘したように[48]，神話モチーフを単純に神話記述のために利用するということは殆どない。ここでも太古の伝説時代の英雄が，現在のローマに巧みに結合されている。一見するとアキレウスはここでその神話的な死にかたを見せているにすぎないかに思えるが，実際はその死を契機として，そしてまさに詩人がこの英雄にかかわる前半部を語りおえたその瞬間から，その死の意味を我々に考えさせ，詩人の表現によって現在のローマに甦るのである。

Ableitinger-Grünberger は，アキレウスの暴力を，政治に付随し，ときには政治を決定する力の象徴であると言っている[49]。我々が取り上げた作品（*C.* 4・6）でアキレウスは、その思い上がりゆえにニオベーやティテュオスらと同じくアポローンに罰せられた。彼のヒュブリスは暴力にたのむものであり，ホラーティウスが常に意識している政治的領域における二極の中の一つを象徴する。そしてもう一方の極を象徴するのはオデュッセウスであると Abl.-Grünberger 女史は指摘する[50]。

我々はこの作品でのアキレウスを政治的文脈にまで引き入れて解釈することにためらいを覚える。確かに，25行から始まる後半部は文字どおりに読めばホラーティウスの詩的世界（「ダウニア（＝イタリア）の詩女神（カメーナ）の名誉を守護して下さい」，Dauniae defende decus Camenae, 27）の喚起ではあるものの，よく観察すればそれが現在のローマの平和な状況，アウグストゥスの平和イデオロギーと深くかかわっていることは上に述べたとおりである。そこには政治的領域への暗示が見られる。しかし，かく暗示されるアウグストゥスの政治との対立像，現在のローマの政治状況の中で考えられる具体的なアンタゴニストを，前半部のアキレウスから推測し，探し出すことは困難であろう。したがって我々は，少なくともこの作品では，アキレウスの暴力を，ホラーティウスが意識するような政治に付随する暴力というふうに，具体的に解釈することをためらうのである。ただし，Abl.-Grünberger 女史のアキレウスとオデュッセウスの対立という図式による両英雄の捉えかたは，我々と全く撰を一にするものである。我々が既に問題にした，*Epst.* 1・2 における両者の対立[51]の指摘は正当である。我々は先に *C.* 4・6 の前半部と後半部を対立する二つの世界として解釈した。この点に即して Abl.-Grünberger の次の発言は重要である。「詩人みずからが *Epd.* 16[52] で象徴的に創造した，精神的な，後にかなり実現されたあの世界，すなわち彼の詩女神らの光に照らされた純粋で平和な世界と，特に人間の内的価値にとっては危険が多いと意識していた（……）あの政治世界との完全な綜合を，ホラーティウスは決して本気でものにしようとしたのではない。彼の詩は，大体において，根本的に独立した二つの領域の，周知のあの緊張関係から生じる」[53]。ここの二つの世界の一つとされる政治的世界を暴力の世界と読み

47) このコントラストによって前半部と後半部が独立分離するわけではない．トロヤからローマへの時間の流れがあってこれがこの作品を一貫し，両部分の断絶を防いでいる．今日ではこの詩を一篇にまとまった作品とするのが定説であるが，かつては1—28行と29—44行とを別々に考える人々もいた．たとえば Peerlkamp は 1862年に上梓した註釈書で29—44行を斜字体にし，この部分を Hor.の真正文書とすることを疑問視したし，またFraenkel によれば Bücheler は同じ部分を別の詩であると考えた．*Op. cit.*, p. 401, n. 2.

48) 拙稿「ホラーティウスにおけるトロヤ戦争の英雄たち」(3)『流通経済大学論集』Vol. 15, No. 4, 1981. 3, p. 7.

49) Doris Ableitinger-Grünberger, *Der junge Horaz und die Politik, Studien zur 7 und 16. Epode*, Heidelberg, 1971, p. 99.

50) *Op. cit.*, ib.

51) 拙稿「ホラーティウスにおけるトロヤ戦争の英雄たち」(2) pp. 49-50.

52) Abl.-Grünberger は *Epd.* 16考察の結果を敷衍する．

53) *Op. cit.*, p. 100.

かえれば，*C.* 4・6 にもあてはまる評言となる。そして我々は，*C.* 4・6 の両部分がトロヤからローマへの時間の流れによって結合されていると言ったが，それは我々の主観に基づく解釈であり，ここで Abl.-Grünberger が言うように，ホラーティウスが無理矢理二つの世界を綜合しようとしている——作品のできが不自然なものとなったであろう——のではない，と言ってよかろう。後半部に述べられる詩的世界，静かな落着いた世界こそ，Abl.-Grünberger も指摘したように，ホラーティウスが理想とし，そして彼の後半生においてある程度現実のものとなった世界である。

### (4) アキレウスにおける政治性

D. Abl.-Grünberger が，アキレウスとオデュッセウスを，ホラーティウスが意識していた政治的世界における両極の表象と捉えていることは上に述べた。この政治性が，ホラーティウスの生涯を貫いて我々がその作品から読み取れる主たる意識要素の一つであることは間違いない。この政治という世界あるいはこれに付随する暴力は，Abl.-Grünberger も言うように[54]，詩人がその苦い体験ゆえに絶えず恐れ続けたものであり，それだけに特に陰画のような形で——神話モチーフの影になって——作品のあちらこちらに顔を出す。たとえば *C.* 3・4 でその表われかたは顕著であり，それゆえ典型的とも言える。この作品の主旨は，

> vis consili expers mole ruit sua.
> 分別を欠く力はみずからの重みで崩れ去る
> (*C.* 3・4・65)

という格言ふうの表現[55]に煮詰められている。これを具体的に説明するために利用されるのがギガントマキア（巨人族とオリュンポスの神々との戦争）の神話である。

> 腕を振り立てて自信にみちたかの若者たちと，緑ゆたかなオリュンポスにペーリオン山を乗せようと力を合わせた兄弟[56]が，ユーピテルを大いに脅かした（*C.* 3・4・49–52）。

ユーピテル（＝ゼウス）はこの戦争に勝ってオリュンポス神界を揺ぎないものにし，またみずからも神々の王の地位を確固たるものにする，という神話である。註家の中には，たとえば Villeneuve のように，このユーピテルを，アウグストゥスを暗示するものと解釈する[57]のはよくないとの意見もある。しかしいちがいにこのユーピテル＝アウグストゥス説を否定することもできない。というのは，これに先だって政治世界の代表者たるカエサル・アウグストゥスの名が出され，彼がどのような業績をあげたかということが暗示され，そのアンチテーゼとして巨人族の暴力が言及されているからである。

> あなたがた（＝カメーナエ[58]）は高貴なるカエサル（ここではアウグストゥスのこと）が，軍務に疲れきった兵士らを町々に引退させたあと，自分の労苦を終らせようと努めるやいなや，ピーエリア[59]の洞窟で疲労をいやして下さる。あなたがたは穏やかな助言を与え，そして与えた結果に喜ぶ（*C.* 3・4・37–42）。

ここでホラーティウスはアウグストゥスに政治世界を代表させているが，これは詩人の意識の中でいわば「良き政治」とされているものである。詩人は明白にアウグストゥスの業績をたたえる。アウグストゥスは，ローマ，イタリアに平和をもたらし，詩人がその本業に勤しむこと

54) *Op. cit.*, p. 99.

55) 神々に対する不敬の結果を簡潔に表現したもの．ピンダロスに類似の文章がある．「しかし力が，力におごる者を遂には投げ落した」（*βία δὲ καὶ μεγάλαυχον 'ἐσφαλεν ἐν χρονῳ*, *Pyth.* 8・15）.

56) オートスとエピアルテース，いわゆるアローアダイ（巨人ではあるが，ギガントマキアの一員ではない）.

57) ユーピテル＝アウグストゥスという等式に応じて，巨人族はアントーニウスを暗示するとの解釈になる.

58) Camenae, ギリシアのムーサイと同一視されたローマの詩女神たち.

59) テッサリアと境を接するマケドニアの南東部，ハリアクモン川の南の地方.

のできる世を回復してくれたという認識である。他方，巨人族は政治の「悪しき部分」，つまり政治を動かしうるあの暴力である。

作品に見え隠れする政治の問題とアキレウスとのかかわりあいを論じるとき，*C.* 1・37 を見落すことはできない。この作品は，

今こそ祝杯を上げようではないか (Nunc est bibendum)，今こそ自由になった足で大地を叩こう，今こそサリイー神官たちの料理を神神の食卓におそなえするべきときだ[60]，皆さん (*C.* 1・37・1-4)，

というローマ市民の解放を喜ぶ歌い出しで始まり，最後はローマを不安のどん底に陥れていたあのクレオパトラの最期を，それでも英雄的に語ったことでよく知られている作品である。

前31年9月，アクティウムの海戦でオクターウィアーヌス（後のアウグストゥス）側はアントーニウスとクレオパトラの連合軍を破った。翌30年8月初めにエジプトの首府アレクサンドレイアは占領され，二人は自殺へと追いこまれた。この作品のテーマは，とくにエジプトの女王の死の知らせが，ローマにどれほどの解放感や歓喜をもたらしたかを表明することである。'Nunc est est bibendum' という冒頭の歓喜にみちた調子は一般市民の胸にただちにこだました，と考えられる[61]。

問題点はこの作品の次の部分にある。

……sed minuit furorem
vix una sospes navis ab ignibus
mentemque lymphatam Mareotico
　　redegit in veros timores
　　Caesar, ab Italia volantem
remis adurgens, accipiter velut
mollis columbas aut leporem citus
　　venator in campis nivalis
　Haemoniae, daret ut catenis
fatale monstrum,……

……しかしこの狂気を辛うじて一艘だけ炎をレ逃れた船が小さくした[62]。そしてマレア（アクサンドレイア近傍の地名）の酒で狂った彼女の精神を本当の恐れへと導いたのはカエサルであった。イタリアから逃走する彼女を櫂によって追いかける様は，あたかもハイタカが柔弱な鳩たちを，あるいは素早い狩人が兎を雪におおわれたハイモニアの野で追いかけるようであり，彼カエサルは悪運をもたらすこの怪物を鎖で縛ろうとしていた (*C.* 1・37・12-21)。

引用文中のカエサルとはオクターウィアーヌス（以下 Oct. と略記する）のことで，むろん後のアウグストゥスである。アクティウムの海戦でアントーニウスとエジプトの連合軍は敗れ，船の多くは炎上し，クレオパトラは早々に戦線を離脱してエジプトに逃げ去った。これを追う Oct. という図である。歴史事実の点からすれば詩人の記述は不正確である。Oct. はアクティウム戦後，謀反鎮圧のためイタリアへ戻り，その後サモス島で冬を過ごし[63]，エジプトへ行ったのは翌年のことである。

前述した *C.* 4・6 におけるアキレウスの意義，すなわち政治的平面で捉えられる——と Abl.-Grünberger は明言する——可能性のある意義に関連して，E. Bickel は，*C.* 1・37・15 以下

60) サリイー神官たち (Salii) はマルス神に仕える12名の神官団．勤務中なら毎日どこにいても盛大な料理を供されたので，一般に立派な食事は「サリイー神官たちが食べるような」(Saliaris) と呼ばれた (Festus,p. 439 L.)．神々にそのような料理を供えるのは謝意の大きさを表わすためである．人間たちの饗宴に似せて，神々の像を食事用寝台に安置し，その前に料理を並べるのは，lectisternium「神餐式」というギリシアふうの宗教儀式である．

61) Fraenkel, *op. cit.*, p. 158. 諸家が指摘するように，冒頭の表現は断片で伝えられる次のアルカイオスの一文を手本にしたものであろう．*νῦν χρὴ μεθύσθην καί τινα πρὸς* (aut *πὲρ*) *βίαν πώνην ἐπειδὴ κάτθανε Μύρσιλος*「今こそ酔わねばならぬ，ぐいぐい飲まねばならぬ，あのミュルシロスめが死んだゆえ」．

62) ローマを支配しようとのクレオパトラの狂気は6—8行に述べられている．彼女は敗戦によって否応なく現実に戻らざるを得なかったとの意．しかし女王がたった一艘の船で逃走したというのはもちろん誇張．アントーニウスの艦隊は全滅に近かったが，女王のそれは大した害を被らないうちにエジプトへ逃げ去った．

63) Nisbet-Hubbard, p. 409.

における Oct. とアキレウスの対応関係，すなわち，Oct. がこの英雄と全く同様に，強大な東方王国という敵（エジプト）に敗北をなめさせたという点にあるとされる対応関係を提唱した[64]が，Abl.-Grünberger はこれは行き過ぎであり，この形では証明できないこととしている。もしそうだとすれば，我々は同時にクレオパトラとトロヤきっての英雄ヘクトールとを等価関係に置かざるをえず，これは行き過ぎであり，おのずから排除されることである，というのが女史の否定理由である。上記引用箇所に関するその所説は以下のとおりである。

「カエサルのハイタカ（accipiter）および素早い狩人（citus venator）との同一視は，敵を追跡するその素早さを暗に指しており，クレオパトラの喩えとしての鳩(columba), 兎（lepus）という語の選択は，女王の本質的特徴を表示することを狙っているのではなく（中略），ただ，直前に述べられた，彼女の狂気（furor, 12）が恐怖（timor, 15）に変ったその瞬間の状況にかかわっているだけである。*Epd.* 16 のフォーキス人の喩えと同様に，ある状況の中で詩人にとって本質的であると思われる二，三の特徴だけが比較によって強調されている。比較の状況的制約は *C.* 1・37 では特に顕著であり，そしてこの制約ゆえに，Bickel が提案するような広範囲で一般的な解釈は排除されるのである」[65]。

Bickel のパラレル説——Abl.-Grünberger は否定する——はそれ自体として極めて魅力的である。東方の大王国トロヤを倒したアキレウスに，エジプト王朝を征服した Oct. をなぞらえるのは判りやすい。また戦場で獲物を狙って追うときのアキレウスの素早さも，逃げるクレオパトラを追跡する Oct. のそれと同じである。

ただ，Abl.-Grünberger にとって問題なのは，Bickel が，*C.* 4・6・3 の一句 'prope victor' を読み誤り，アキレウスを直接のトロヤ征服者（本当はオデュッセウス）であると解釈し，そこから出発してアキレウス＝東方王国征服者＝Oct. という等式を導いている点である。Abl.-Grünberger の意見は，*C.* 1・37 (Nunc est bibendum) の記述は，アクティウムの海戦で逃げるクレオパトラを Oct. が追うという歴史的事実（歴史記述としての不正確さは前述した）の中のその一齣に制限して解釈すべきであり，したがって Oct.＝アキレウスという等式を立てるのは行き過ぎである，とするものである[66]。

我々も Bickel の読み違い（Troiae prope victor altae, *C.* 4・6・3）という Abl.-Grünberger の指摘は確かに正しいと思う（何度も言うようにアキレウスは木馬作戦以前に死んだ）。しかし，だからといって，*C.* 4・6 とは切り離して，特に Bickel の読み違いの一件とは切り離して，いま一度この *C.* 1・37・12-21 のイメージの持ちうる意義を考察する価値はないのであろうか。これは必ずアクティウム海戦にかかわる歴史事実の一齣としてのみ理解すべきであろうか。というのは，もし Oct.＝アキレウスという図式を立て，この両名を東方王国打倒者として見るならば，必然的にクレオパトラ＝ヘクトールという等式も成立するはずであり，これはそれ自体として排除されるもの，とするのが Abl.-Grünberger の反論であった。この「それ自体として排除されること」の理由づけは，筆者が推測するに恐らく，アキレウスは決定的な東方王国征服者ではない，ゆえにトロヤ王国（オデュッセウスの計略で崩壊した）の代表者だったヘクトール(アキレウスに倒された)と，Oct. に倒されたエジプトのクレオパトラとは対応しない，との一事にあるようである。要するに Abl.-Grünberger は Bickel の読み違いに力点を置き，これを軸として Oct.＝アキレウスというパラレル関係を否定するのである。はたしてこのように *C.* 1・37 の記述を状況的に狭めて解決するのが妥当かどうか，一考の価

64) Ernst Bickel, 'Politische Sibylleneklogen', *RhM.*, 97/1954, p. 210 ff.

65) Doris Abl.-Grünberger, *op. cit.*, p. 99, n. 83.

66) 理由は不明であるが Oksala も「Hor. は，Verg. や Propert. らとは違って，アクティウム戦を神話化していない」としてこの部分の神話的文脈による解釈を一言で斥けている．*Op. cit.*, p. 25, n. 2.

値がある。ここでもう一つの証言に耳を傾けたい。

Abl.-Grünberger が否定した Bickel の Oct.＝アキレウス対応説を取り入れて，明白にこの説を主張しているのは同じくドイツの Pöschl である[67]。まずこの学者は，Oct.に具現されるローマ的，イタリア的な冷静果断な態度が，あの電光石火の追撃と同様に，非常に簡潔な表現方法で適切に述べられている点に注目し，問題の人物のカエサル（＝Oct.）を修飾する形容語句が一つもない——抒情詩集（カルミナ）の中でも特にエピセットの豊富なこの *C.* 1・37 で——ことを指摘する。これはなるほど彼が述べるように表現上の大きな工夫と言えよう。しかしこのカエサルはエピセットのない代り比喩をもって語られている。訳文で示したように比喩は二つあり，一つはハイタカがおとなしい鳩を追い，もう一つは猟師がハイモニア（＝テッサリア）の雪の野で兎を追いつめるというものである。そのように，Oct.は，もはや彼の手から逃れるべくもない犠牲を攻めたてる。ここで Pöschl は，ホラーティウスが，Oct.の軍事行動を大胆にホメーロス的な直喩という単純な形で表現していると解釈し，Oct.とホメーロスの英雄たちとの接近を指摘する。

ここで第一の比喩に関して Pöschl は，Bickel と同様に，ホメーロスの一文を援用して，更に具体的に，ホメーロスの英雄たちの一員であるアキレウスの名をあげる。その文章は，ヘクトールとの決戦の序部で，追撃するアキレウスを鷹になぞらえて特徴づけている。

そしてペーレウスの息子は自分の素早い足を信頼して〔ヘクトール〕に跳びかかる。それは，山で，鳥のうちでもいちばん敏捷な鷹が臆病な鳩めがけて軽々と突進する，その有様そっくりだ。鳩は斜めに逃げるが，そのすぐあとから鷹が，鋭い叫びをあげて，まぢかに迫る。その心が鳩をつかまえるよう命じるのだ（*Il.* 22・138-142）。

Pöschl は第二の直喩によってこのパラレル図式を断定的に肯定する。「ハイモニアの曠野の迅速な猟師」は，古代においてその信じ難いほどの素早さが周知されていたアキレウスを意味する，と。類似例がピンダロスやカトゥルスらの作品にもある。特に Pöschl の解釈を力づけるのは，ハイモニアという地名がピンダロス以来テッサリアをさすこと，そしてアキレウスはこのテッサリアで生まれ，まさにテッサリアの一部であるペーリオン山でケイローンの薫陶を受けたという神話上の事実である。ローマの韻文でアキレウスはしばしば Haemonius「ハイモニアの」と称される[68]。よって，ここで Oct. は，テッサリアの神話的風景の中で狩をする任意の脚の速い猟師にではなく，この高名な神話的猟人アキレウスになぞらえられているのである[69]。

Pöschl の解釈に従えば，この直喩によってホラーティウスはアクティウムという歴史事実にホメーロスふうのパトスを与えた。現在的な事件が神話と結合してより深い普遍性を獲得する。そうすることによってホラーティウスは神話のもつ一つの重要な原機能を新たにする。すなわち，人々の出会いとか歴史的な出来事は，それらが原古のもの（Urzeitliches），神話的なもの（Mythisches）を反復するときはじめて真実のものとなる[70]。Pöschl のこの発言は，ホラーティウスにおける神話を考察する上で示唆的である。

Oct.＝アキレウスという喩えは喩えとして，それではこの比喩は結局どういう意義をもつの

67) Viktor Pöschl, *Horazische Lyrik*, Heidelberg, 1970, pp. 84-90.

68) Propert. 3・1・26, Ov. *Ars am.* 1・682 ; *Met.* 12・81 ; *Amores*, 2・9・27 ; *Fasti*, 5・400 など.

69) 更に Pöschl は文学資料だけではあき足りず，プリマポルタのアウグストゥス像が，ギリシアの立像作家ポリュクレイトスの手になるアキレウス像のヴァリアントであるということにも言及して，美術の面からも自説を裏付けようとしている.

70) Pöschl は M. Eliade の思想を取り入れている. *Op. cit.*, p. 88, n. 44.

か。Pöschl の結論は次のとおりである。兎が静寂の中で確実に死へ追いやられているその冬の雪景色は，ただ単に「狩猟一般の古代的描写の定形（トポス）」ではなくて，クレオパトラが置かれた冷酷な状況と，夢から現実（うつつ）へ戻る女王の幻想瓦解とのきわめて暗示的な象徴である，と。

以上が Pöschl の見解であるが，Oct. とアキレウスの対応関係を徹底的に主張している。Abl.-Grünberger との相違は明白である。両者とも Bickel の見解を勘考しているが，それ以後の方向は正反対である。そして，ともに Bickel への言及はあるものの，両者相互の言及はない[71]。

注意すべきことは，Pöschl がクレオパトラの神話的原像は誰かということを一言も論じていない点である。他方 Abl.-Grünberger は，既に述べたように，東方王国の征服者としての共通点から Oct.＝アキレウスという図式を出した Bickel の説を基にして，それなら当然クレオパトラ＝ヘクトールという等式も出てくることになるが，後者はそれ自体として不可能であるゆえに，その前提となる前者の対応関係も不可能である，とした。この説にもそれなりに尤もと思わせるところはあるが，しかしよく考察すると，これは論者（Abl.-Grünberger）が「東方王国」という一事に拘泥しすぎた結果であることは明らかである。

確かにアキレウスは木馬作戦以前にパリスの矢で倒され，トロヤ陥落に身をもって参加することはできなかった。しかし，東方の強国トロヤの主将ヘクトールを倒したのは，言うまでもなくアキレウスである。ヘクトールなきあとのトロヤはいわば骨抜きであり，半ば破滅に瀕したも同然である[72]。クレオパトラはこのヘクトールになぞらえたものであるとの仮説に対する我々の疑問は既に述べた。しかし，もしここで Abl.-Grünberger の言う方向でヘクトールを取り上げねばならないとすれば，その必要があるとすれば，以上の如くヘクトールについては言えるはずである。

我々は，Abl.-Grünberger の説は，この部分のホラーティウスの記述を歴史的状況という枠に制限して解釈することに急なあまりに，アキレウスの敵としての東方王国トロヤとトロヤの主将ヘクトールとを区別するという，細かすぎる——そして不必要な——考察を働かせた結果生じたものであろう，と考える。我々自身がクレオパトラとヘクトールを並べるのをためらうのは，第一に，追われて逃げる鳩や兎と，雄雄しくアキレウスと対決した巨人として伝えられるヘクトールとがイメージの上で一致しないからである。いま一つの理由は，トロヤからローマへという流れで言えば，ヘクトールは，アエネーアースと同様に，ローマ人にとってアキレウスより以上に身近な人物であった，ということである。しかし我々は，この部分でアキレウスの対抗者としてヘクトールを云々する必要はないと考える。これは今述べたように Abl.-Grünberger のあまりにも細かい思考操作の産物であった。ホラーティウスはここでは Oct. のあの歴史的瞬間を，軍事的な一齣を，それにふさわしく叙事詩的に述べるべく，アキレウスのイメージ——ホメーロスのもの——を借りたのであり，これに応じてクレオパトラを誰かに擬した可能性は少ない，と我々は考える。Oct. に追われるクレオパトラ自身がか弱い鳩であり兎である。このことはアキレウスと Oct. の対応という解釈の障害にはならない。したがって我々は，Pöschl とともに，また Bickel とともに，ここでは Oct. にアキレウスのイメージが重なり合っていると考えるのである。

以上，*C.* 1・37も一般的に言えば神話のモチーフを巧みに現実世界の事象に適用した一つのホラーティウス得意の叙述例である。しかもここではアキレウスの名は出ず，暗示のままに終始する。それだけに様々な解釈の可能性があろうが，我々は Oct. と神話の英雄アキレウスが対応するとの解釈を選んだ。これは神話利用の

71）これは恐らく両者の論文がさしたる期間を置かず相前後して発表されたことによるものと思われる．

72）但し，繰り返し述べたように，直接とどめを刺したのはオデュッセウスである．

技法を最高度に発揮した例と言えるであろう[73]。

※

アキレウスについてはまだ他にもいくつかの文例があるが，そのすべてを取り上げる必要はない。いずれの場合もホメーロスの *Il.* における——あるいは叙事詩圏詩人らの作品による——この人物の性格，イメージに根ざすものばかりであり，上にあげた二，三の例によってホラーティウスの描いたアキレウスはおおよそ言い尽くされたと信じる。アキレウスの場合，力一辺倒の英雄という抜き難い性格があり，たとえば *Sat.* 2・5 (Hoc quoque) のオデュッセウスのような型破りな扱いかたは見られない。

最初に取り上げた文例 (*A. P.* 119–122) はアキレウスの性格を表現する形容詞を四つ含んでいるが，これは勝ち誇って得意の絶頂にあるときの姿を示すものであり，この箇所では悲劇の主人公としてアキレウスを描く場合の注意事項を詩人が述べているもの，と我々は考察した。

第二，三の文例 (*Epd.* 13・12–18, *C.* 2・16・25–30) は，他の例とは違って，彼の短命という特性に的を絞って述べたものである。しかしこれがこの人物の性格について我々が抱くイメージに大きな影を落している要素であることに変りはない。そしてこの生命の儚さは彼の悲劇性を決定的にしている。花の生命という言葉があるように，詩人は生命と名誉のバランスをうまく表現している。

第四の例 (*C.* 4・6) に見るアキレウスはまさに暴力の権化であり，この点でいかに恐るべき存在であったかということが強調された。戦士として勇敢無比であったというだけではなく，残虐な行為もあえてしたであろうとの認識をホラーティウスは持っている。この場合もちろん詩人の目はトロヤ・ローマという視点に立ってのものである。これは *Epst.* 1・2 について指摘されたオデュッセウスとの対立図を裏付ける。ホラーティウスはあるときは英雄たちを何らかの共通項で一括し，あるときは英雄たちを更に細分してそれぞれに何らかの評価を与える。*Epst.* 1・2 では後者の操作がなされたわけで，善と悪という二つの大きな倫理項目を語るに際して，まさにこの二人の対立は恰好のモデルとなった。残虐，暴力に対する英知という図式できめつけるのは，二人物の性格上のニュアンスなど細かい部分を捨象することになるが，それでも詩人の選択が適切なものであることは言うまでもない。

最後の例 (*C.* 1・37) は，実際はアキレウスの名も出ない文章で，そこに彼のイメージを求めることに反対する学者もいるが，しかし表現技術の点から考えて，詩人の念頭にアキレウスがあったことは間違いないと思われる。最前の例とは逆にこのアキレウス像が，立場を変えてローマ側に立つものであることに注意されたい。

第四例でのアキレウスは可能性としては悪の象徴ともなりうるものである。彼は神々の定めた若死によって，極限的な悪を実践するには至らなかった。しかし古代叙事詩において戦場で敵を倒すのは英雄的行為に他ならない。この意味で，アキレウスはホメーロスの描く英雄たちの中でベストを尽くした典型的な英雄である。古代詩人，というよりホラーティウスが彼を純粋に詩的風景の中で嫌悪したということはない。詩人の抱いた感情はその逆であったはずで，だからこそ *C.* 1・37 で，現代ローマの支配者たる Oct. にアキレウスの姿を重ねるに当って，詩人の側には何ひとつ問題はないのである。この戦士のイメージを使うことによって Oct. の人格が貶められることはいささかもない。

73) 知りえた限りで，ここの Oct. をアキレウスに重ねて解釈するのは Bickel, Pöschl の二人で，これを否定するのは Abl.-Grünberger である．「カエサルの役割はこの直喩において別段英雄的なものではない」とする Commager は後者に近い．*Op. cit.*, p. 91. Commager はホメーロスには言及していない．註釈者たちはおおむね *Il.* 22・138–142 の場面との類似を指摘するものの，Oct. とアキレウスがパラレルであるとは特に言っていない (Orelli, Page, Kiessling-Heinze, Plessis-Lejay, Nisbet-Hubbard). Villeneuve, Bentley, Peerlkamp らは無言．Oksala については注66で触れた．Doblhofer は，Oct.＝アキレウス説に言及するもののこの問題には関心を払わない．問題の狩猟場面がホメーロスのものであることは認めている．Ernst Doblhofer, *Die Augustuspanegyrik des Horaz in formalhistorischer Sicht*, Heidelberg, 1966, p. 95.

ホラーティウスは *Il.* を熟知し，アキレウスの一挙一動をことごとく脳裡に納めているので，必要に応じて選択的にその人物像を利用することができた。この自在さがなければ，ホメーロスの英雄と現代ローマとの結合などは，まず不自然な，ぎくしゃくしたものになったはずである。

## VI むすび

4回に分けて続けてきた論考は以上で終る。各回ともそれぞれのテーマに基づいて結論を出したので，ここでは二，三の点を繰り返すにとどめたい。

ホラーティウスはまず諷刺詩人としてその詩才を世に問うたが，やがて抒情詩集 *Carmina* によってローマ文壇における地位を確立した。いきおい，この詩人における叙事詩的要素はないがしろにされがちであった。しかし，その作品を検討した結果，実際は，抒情詩を作っていた日々から晩年に至るまでに，彼の手になる叙事詩ないし叙事詩的作品の作制が期待されていたことが明らかになった。時代の要請——新生ローマにふさわしい壮大な印象を与える作品を欲した——は，マエケーナースやアウグストゥス（オクターウィアーヌス）らの慫慂，友人たちや市民の期待となって表われた。しかし詩人は，その可能性を持っていたにもかかわらず，自分はその任に耐えられないとして拒否しつづけた。リウィウスやウェルギリウスといった友人たちがその方面で遺憾なく天分を発揮していたので，今更自分がこの分野に入る必要はあるまいとの認識，そして，ギリシア抒情詩の形式をラテン語に移し植えて「ホラーティウスの詩」を確立したいという詩人としての情熱などが主たる理由であろう。同時に，古代の叙事詩は戦争や国家建設といった規模壮大なことを歌うものであった。しかるに彼には個人的経験から，このような事柄は避けたいとの要請があった。

要請される叙事詩テーマを回避する過程で彼のホメーロスに関する知識，この叙事詩人に寄せる敬意を我々は読み取ることができた。ホメーロス的光景をそっくり記述しながら，このようなことは書けないとする拒否方法(recusatio)はかなり微妙である。度が過ぎると「このような才能を持っているのだ」と主張することになるから。しかし，リウィウスやウェルギリウスの同時代人としてホラーティウスがそのような過信に陥ったはずはないとの確信を我々は得た。

ホラーティウスはこのギリシアの叙事詩人を生涯にわたって敬愛し（偏愛したと言う研究者もいるほどである），特に後期においては，人間の生活，行動の指針となる教師であり，すぐれた哲学者であるとの評価をしている。古代ではホラーティウスに限らないが，ホメーロスの作品は一般的に倫理規範の集大成と見なされていた。

ホメーロスは善と悪，美と醜，益と不益などの区別を示すのにオデュッセウス，アキレウス，アガメムノーン，パリスといった英雄たちの行動をもってした，とホラーティウスは認識している。特にオデュッセウスとアキレウスの二人は，モラルの書き分けが要求されるときは明確に対立的な存在として把握されている。かといって，この両名は善と悪の区分を如実に表わす人物として一面的に捉えられているわけではない。たとえばオデュッセウスは，その小利口なところ，小悪党的な面のあることが古くから認められていて，そのためによくバーレスクの主人公に使われた，という文学史的事実を詩人はよくわきまえていた。そこから *Sat.* 2・5の金を漁る英雄という記述が生まれるのであり，これもオデュッセウスという多面体の一面である。アキレウスにしても暴力的で怒りっぽい戦士としてのみ記述されてはいない。この伝統の一部である花の生命の象徴としての考えかたがホラーティウスにあることが判明した。

この二人をはじめとして戦士たちに言及するとき，詩人の意図は，ホメーロスの場面を単純に反復再現することではなく，あくまでも彼自身の考えを明白にするために彼らの姿を利用することである。プロペルティウスやオウィディウスらとは違って，ホラーティウスは純粋に神

話を語ることは殆どない。

トロヤ戦争といってもテーマとして扱ったのはいずれもギリシア方の英雄だけである。トロヤの英雄としてはヘクトールやアエネーアースがいる。ヘクトールは都市防衛の主柱として任に当ったが，巨大な敵の前に殪れ，その役割を終えた。アエネーアースは，トロヤからローマへというローマ史観に立つ人々にとって，その橋渡しをした重要な人物と見られていた。以上で我々はホラーティウスにおけるギリシア英雄神話の世界を垣間見たが，次はローマの伝説と歴史の世界に目を転じ，ローマの英雄たちがどのように捉えられているかを検討したい。アエネーアースもそのときに論考の対象となるであろう。最後に，念のため，これまで使用してきた注釈書類の略記方法を付記する。

Bentley : *Q. Horatius Flaccus*, R. Bentley (1662-1742), Vol. II, 1978 (1869[3]).

Fairclough : Horace, *Satires, Epistles and Ars Poetica*, H. R. Fairclough, 1978 (1929[2]).

Kiessling-Heinze (K-H.とも) : (1) Q. Horatius Flaccus, *Briefe*, erklärt von A. Kiessling, 3. Teil, bearbeitet von R. Heinze, 1968[8]. (2) *Oden und Epoden*, erklärt von A. Kiessling, 1. Teil, besorgt von R. Heinze, 1968[13]. (3) *Satiren*, erklärt von A. Kiessling, 2. Teil, erneuert von R. Heinze, 1968[10].

Klingner : *Q. Horati Flacci Opera*, F. Klingner, 1959[3].

Morris : Horace, *Satires and Epistles*, E. P. Morris, 1939.

Nisbet-Hubbard : *A Commentary on Horace : Odes, Book 1*, R. G. M. Nisbet and Margaret Hubbard, 1970.

Orelli : *Q. Horatius Flaccus*, I. G. Orellius, I. G. Baiterus, Vol. Pr. 1851.

Page : *Q. Horatii Flacci Carminum Libri* IV, *Epodon Liber*, T. E. Page, 1964 (1883).

Palmer : *The Satires of Horace*, A. Palmer, 1964 (1883).

Peerlkamp : *Q. Horatii Flacci Carmina*, P. H. Peerlkamp, 1862[2].

Plessis-Lejay : *Oeuvres d'Horace*, E. Plessis et P. Lejay, 1921[9].

Préaux : Q. Horatius Flaccus, *Epistulae Liber primus*, j. Préaux, 《Érasme》, 1968.

Villeneuve : (1) Horace, *Épitres*, F. Villeneuve, 1964[5]. (2) *Odes et Épodes*, F. Villeneuve, 1967[8]. (3) *Satires*, F. Villeneuve, 1966[7].

Wilkins : *The Epistles of Horace*, A. S. Wilkins, 1965 (1885).